神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

ナイアガラの保護運動と英国湖水地方における鉄道敷設反対運動

メタデータ	言語: Japanese
	出版者:
	公開日: 2016-12-22
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 吉川, 朗子, YOSHIKAWA, Saeko
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/2085

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

ナイアガラの保護運動と
英国湖水地方における鉄道敷設反対運動

吉川　朗子

1885 年ナイアガラ保護法案（Niagara Reservation Bill）がニューヨーク州議会で可決され、ナイアガラは保護区となることが決定される。このことはロンドンでも歓迎され、『ペル・メル・ガゼット』には「アメリカのこの事例は、本国でも見られる同様の世論の流れを確かなものとするだろう。このところ下院において立て続けに鉄道法案が否決されていることにも、それは現れている」と評されている（“Rescue of Niagara”）。ここではイギリスにおける鉄道建設への反対運動と、北米大陸におけるナイアガラ保護運動とが同じ世論の流れのなかにあると捉えられているが、翌年 1886 年 12 月には次のような投書が『タイムズ』に掲載された。

> イエローストーン、ヨセミテ渓谷を、鉄道の進入できない国立公園として保存しようという合衆国の例が、我々の前に提示されている。見習う価値のある範例と言えるだろう。しかしながら我々の湖水地方は、人をさらに教化する力を持っており、アメリカ人にとってのイエローストーン渓谷よりもさらに大きな価値を、イギリス人にとって持つはずだ。なぜなら、湖水地方は単に景観の美しい場所というだけでなく・・・山々、小川、谷間、集落など、殆どどの片隅をとっても・・・偉大で気高い英文学の巨匠たちの思い出に満ちているからだ。彼らの多くは、清らかな流れの傍らや、寂しい山々の孤独のなかに霊感を見出したのだった。（Hills）[1]

---

* 本稿は、科研トランスアトランティック・エコロジー研究会（2016 年 3 月 14 日、於同志社大学）における研究発表を元に、加筆修正したものである。また、本稿は JSPS 科研費（基盤 (B) 15H03189）の助成を受けた研究成果の一部である。

[1] ここに言及されている英文学の巨匠たちとは、湖水地方にゆかりのあるワーズワス、サウジー、ド・クィンシー、ヘマンズ、アーノルド、テニソン、ラスキンなど複数含むだろうが、一番に想定されているのがワーズワスであることは間違いない。

この書簡は、英国湖水地方への玄関口ウィンダミアから中央部アンブルサイドまでの鉄道延伸計画に反対する運動の一環として書かれたものであるが、ここでアメリカのイエローストーン、ヨセミテの二つの公設の公園について触れられている点が興味深い。[2] ナイアガラの例とあわせると、イギリスにおける自然地保護を訴える活動家たちがアメリカの例を絶えず意識していたことが窺われる。アメリカに倣うべきだと認めつつも、英国湖水地方は風景美だけでなく文学遺産という付加価値があるからさらに保護するに値する、としている辺りには優越意識が垣間見られるが、[3] 大西洋の両岸で互いの活動を意識しあいながら、自然地保護の運動が展開していったことが分かる。[4]

メラニー・ホールがすでに指摘しているように、北米におけるナイアガラ保護運動と英国湖水地方における鉄道敷設反対運動とは、時期が重なっており、運動の中心を担った英米の人物たちの間には個人的な交流もあった。たとえば、ナイアガラ保護運動を支えたハーバード大学美術史教授ノートン（Charles Eliot Norton, 1827-1908）は、湖水地方における鉄道敷設反対運動を支えたラスキン（John Ruskin, 1819-1900）や彼に影響を与えたカーライル（Thomas Carlyle, 1795-1881）と親交があった（Hall, “Niagara Falls” 32-33）。また、ノートンの親戚にあたり、オルムステッド（Frederick Law Olmsted, 1822-1903）の弟子であった景観設計者（landscape architecture）エリオット（Charles Eliot, 1859-1897）は、ワーズワス信奉者であり、1885-86 年に渡英した際には、ハンター（Robert Hunter, 1844-1913）がまとめたナショナル・トラスト構想案を入手して感銘を受けている。一方、ワーズワス協会員であり湖水地方における自然地保護活動の中心的人物であるローンズリー（Hardwick Drummond Rawnsley, 1851-1920）に会った際には、アメリカにおけるナイアガラやイエローストーン保護運動について情報を提供している（Hall, “American Tourists” 104-105）。上掲の公開書簡を書いたヒルズもワーズワス協会のメンバーであり、おそらくアメリカにおける自然地保護についての知識は彼らの間で共有されていたであろう。このように、19 世紀の英米における自然地保護運動を担った知識人たちの交流には、詩人ワーズ

---

[2] イエローストーン渓谷は 1872 年に作られたアメリカで最初の国立公園。ヨセミテ渓谷は 1864 年に州立公園、1890 年に国立公園になる。

[3] 他方、国立公園がイギリスに先んじてオーストラリアやアメリカでまず制定されたという現象に注目し、ここには、「自然」と「文化」の二項対立のうち前者をアイデンティティの核とすることで、「新世界」が宗主国イギリスの文化的リーダーシップから脱していった動きが見られる、とメラニー・ホールは捉えている（Hall, “American Tourists” 106）。

[4] 本論では、自然の要素が多く残された場所という意味合いで「自然地」という言葉を用い、また自然全般を保護しようという「自然保護」ではなく、具体的な場所を念頭に置いた「自然地保護」という言葉を用いる。

ワス（William Wordsworth, 1770-1850）という媒介があったことも見逃せない事実である。ホールなどの先行研究を参照しつつ、本論では、アメリカ・カナダに跨るナイアガラ滝周辺地域と、英国湖水地方を俎上に載せ、ワーズワスの影響にも留意しながら、それぞれの地域における観光・景観保護運動が互いにどう影響・反響しあいながら展開していったのかを検証する。その際新たな資料も加え、また、ナイアガラ保護と湖水地方鉄道敷設反対に関する言説を丁寧に読み返すことで、この時代の英米の自然地保護思想は、共通する文化意識、あるいは文学的・美学的感性に支えられていたことを明らかにしたい。

１．ナイアガラ・英国湖水地方における観光の発展（1850 年以前）

まずは保護運動が起こる前、19 世紀前半までの、両地域の状況を概観しておきたい。ナイアガラ滝がヨーロッパ人に「発見」されたのは 17 世紀初頭と言われるが、18 世紀を通して少しずつ旅行者に知られるようになっていく。その名声はイギリスにも届くが、情報の少なさ故か、湖水地方を宣伝するための謳い文句なのか、湖水地方にある滝が「イングランドのナイアガラ」と呼ばれることもあった。たとえば 1778 年に出版されて以来半世紀にわたって版を重ねたトマス・ウエストのガイドブックには「湖水地方のナイアガラ、名高きロドア滝（Niagara of the Lake, the renowned cataract of Lowdore）」と記されている。[5] もっとも、湖水地方の特に深奥部は 18 世紀後半まで sublime, dread, savage grandeur といった言葉で形容される未開の地と思われており、当時の絵画にはかなり誇張された姿で山や滝が描かれていたことを考えれば、そういった連想が働くのもあまり不思議ではないのかもしれない。[6]

19 世紀になると、ナイアガラも湖水地方も着々と観光地化が進んでいき、情報も増えていくと、ナイアガラ滝に比べられるような壮大な滝はイギリスにはないという言説も現れるが、19 世紀前半においてはまだ、たとえばナイアガラよりロドア滝の方が詩的で魂に訴える（inspiring）、[7] ナイアガラなどへ行かなくてもストックギル滝（Stockghyll Force）という崇高で美しい滝がある（Wilson

---

[5] West 95. 他にも、Otley 33, Payn75 など。現在のつづりは Lodore.

[6] たとえば John Dalton の “Descriptive Poem, Addressed to Two Ladies, at their Return from Viewing the Mines, near Whitehaven”（1755）はロドアの「恐ろしげな」岩を轟き落ちていく滝を、“Horrors like these at first alarm, / But with savage grandeur charm, / And raise to noblest thoughts the mind” と描写している（Powell and Hebron 1）。18 世紀における湖水地方の風景表象については、パウエルとヘブロンの編纂した画集にいくつか収められている。

[7] “Cockneyism of English Cascades” 73 参照。この記事は、ロドア滝にはサウジーが詩を捧げているが、ナイアガラ滝にはそうした詩人はいないと言っている。ナイアガラ滝には芳名帳に詩を記す旅行者が多かったというが、それは数に入れられていないようだ（Hutchings 143）。

125）といった言説も多くあった。こうした言説に見え隠れするのは、アメリカには「手付かずの（wild）」自然美があるが、それはイギリスの「文学的・文化的な価値を付与された」景観美には敵わないのだ、という考えである。アメリカを訪れたことのないワーズワスまでが、これから訪米しようとしている友人ロビンソンに宛てて「アメリカなんて景色と呼べるものなどないじゃないか、ナイアガラはたしかに一級品だが、大西洋を渡ってまで見る価値はない」と切り捨てている。[8] ここにも、イギリスの自然風景を「文化的景観」として自負する思い、すなわち文化的優越意識が表れている。

1830 年代後半から 1840 年代にかけて、ワーズワスの暮すライダル・マウントには大勢のアメリカ人愛読者が訪れたが、そうした訪問客を、詩人はしばしば近くのライダル滝（Rydal Falls）へ連れて行った。1840 年夏に訪れたカルヴァート（George Calvert, 1803-1889）は 5 週間前にナイアガラを見てきたところだとうっかり言ってしまうが、それを聞くとワーズワスは対抗意識を燃やし、ぜひライダル滝も見てほしいと言う。カルヴァートもまたライダル滝を「美が宿る完璧な場所」だと評し、「時折ワーズワスの深い声が滝の音とまじりあった。穏やかで晴れやかな夕暮れ――我々は山々に抱かれたイングランドの庭園（English Park）[9]にいた。我々は美に聖別された場所に行ってきたのだ。傍らにはワーズワスが共に歩いていた」と、高揚した調子でライダル訪問の項を締めくくっている（Calvert 3）。詩人ワーズワスの存在が滝を特別なものとしていると受け止められている。ライダル滝は上滝（higher fall）と下滝（lower fall）の二つの滝の総称であるが、どちらもピクチャレスク・ツアーのころから愛でられ、多くの絵に描かれ、ワーズワスをはじめとして詩にも描かれてきた（Powell and Hebron 106, 132, 134, 145）。そうした文化の力が付加価値をつけていると言えるだろう。

他方、湖水地方をひきあいに出してナイアガラの卑俗化を嘆いているのが以下の引用である。滝ハンター（cascade-hunter）を自認するラトロウブ（Charles Joseph Latrobe, 1801-1875）――後にオーストラリアのヴィクトリア植民地で副総督になる人物――が書いた旅行記の一部である。少年の頃に英国湖水地方の滝を数多く訪れ、成年になるとヨーロッパの名だたる滝を訪れ、ついに 1832-33

---

[8] William Wordsworth to Henry Crabb Robinson, 16 June 1834, Knight 3: 53-54.

[9] ここでの English Park とは、狭義にはライダル滝を含む Rydal Park（フレミング家の狩猟用の土地）を指しているだろうが、将来のナショナル・パーク（イギリス国民みなのための公園）を想起させる表現にも聞こえる。ただし、カルヴァートのいう “English” にはアメリカ人も含めた英語を話す人々の心のふるさと、というようなニュアンスも感じられる。ホールによれば「『英語を話す民族』から成る国境を越えた共同体」という考え方は 1860 年代以降に強まったようであるが（“Niagara Falls” 27）、カルヴァートもそうした感性を示しているように見える。

年ナイアガラを訪れる機会を得た、ということを述べた後、次のように言う。

> 今世紀初めにはナイアガラはアクセスも難しく、訪れる人も稀で、まだ野趣溢れる滝であった。・・・野生児か奥地に暮らす頑強な男を案内人に雇って辿りついた少数の者は、目を見張り、畏敬の念に打たれ、無言で帰っていったものだ。けばけばしく塗りたてたホテルが木々の上に頭を出したり、沸き立つ川の岸辺に白い建物が顔を出すことはなかった。・・・しかし今はどうか？至るところで森は切り倒され、こぢんまりとした生垣や東屋、庭のあるホテル、けちな施設がやたらと目立つ。博物館、製材所、階段、料金所、パブ、ダービシャーの温泉地かアンブルサイドにありそうな詐欺まがいの施設が観光客をお出迎えだ。島から島へ橋が架けられ、ゴート島を訪れるのはもはや冒険ではない。・・・蒸気船・鉄道・運河・馬車のおかげで、都会と同じように時間も場所も指定して待ち合わせができる。つまりナイアガラはいまやストックギル滝かライダル湖のように世間ずれしてしまったのだ。（Latrobe 1: 64-65）

アンブルサイドは古代ローマの時代から交通の要所であり、湖水地方を旅行する際の拠点となる町として、19 世紀初頭にはホテルや飲食店も多くあった。ストックギル滝やライダルはそこから散策するのに手軽な距離にある自然美だった。いわば、町の便利さと自然美とを両方いっぺんに手軽に楽しめ、すっかり手垢がつき世間ずれ（haknied）している点が、ラトロウブには気に入らなかったようだ。観光開発は湖水地方よりナイアガラの方が少し早く進んだようだが、ラトロウブの目には、ナイアガラが湖水地方を真似て卑俗化しているように見えたのだろう。アメリカの自然は「手付かず」のものであってほしいと願うが故の義憤とも言える。[10]

ラトロウブはしかし、ひとしきり嘆いて見せた後で、ナイアガラには人の手で損なわれていない自然美も残っていることを見つけ、興奮気味に語る。

> 我々はやがて、ナイアガラ滝とその周囲には、忙しい人の手、便利さや自己顕示欲を求めたつまらぬ計画で損なわれていない面もあることを発見した。・・・我々はすっかり魅了されていた。水音が聞こえている範囲では、滝の一部になるとは言わないものの、他のことを考えたり、話したり、夢

[10] 少し後になると、ストックギル滝を見る際に料金を取られるという事態に憤慨して、ナイアガラでも商業主義が非難されて景観保護運動が起きているように、湖水地方でもこうした非文化的蛮行（vandalism）は弾劾されるべきだ、ということが訴えられている（“A Week at the Lakes”）。

> 見たりすることはできなくなる。振動があたりを満たす――呼吸する空気、座っている土手、今字を書いている紙を震わすだけでなく、体全体、神経組織に働きかけ、ぞくぞくさせる。ほとんど不快なまでの驚くべき感覚だ。(66)

ラトロウブは、人の手では損ない得ない自然界の持つ霊的な力を、滝とその周辺に感じ取り、その力に圧倒されている。自然との一体化という神秘的体験は否定しているものの、原始の自然に価値を見出そうとするロマン主義的な旅行者の姿が窺える。

ナイアガラ滝をウィルダネスの象徴として見るこのような価値観は、滝を観光資源として利用しようとする実利的立場とは相容れないものであるように思われるが、皮肉なことにこの二つの立場は互いに寄りかかりあい、19 世紀半ばまでには、滝は「ロマン主義的商品（Romantic commodity）」になってしまう（Mulvey 190-208; Hutchings 139-44）。大自然の神秘に触れたいという旅行者の思いは鉄道、橋、蒸気船などの交通網の整備によって可能になり、[11]滝の迫力を間近で感じたい人のためには滝裏へ降りていく階段や滝を真上から見下ろすための展望塔が用意され、原初の自然が失われてしまったと嘆く旅行者には、そのノスタルジアを満たすための土産物（先住民の工芸品）が提供された（Hutchings 142）。さらに、滝の迫力・脅威・美しさを効果的に演出するための綱渡り、ダイビング、花火などの見世物が行われ（Gardner 28）、中国風パゴダ、動物園、カメラ・オブスキュラ、骨董屋などが立ち並ぶようになっていく（Hall, “Niagara Falls” 30）。このように、自然の驚異を崇める旅行者の態度が滝を観光資源に仕立て、やがて観光産業は、旅行者のロマンティックな価値観を完全に商品化してしまう。1859 年の『タイムズ』に「遊園地（pleasure ground）」[12]だと評されるように、ナイアガラは自然の驚異（wonder of nature）を伝えるものというよりは、見世物として楽しむ wonderland へと変えられてしまったのである。

２．ナイアガラ保護運動（1869-1885）

1869 年から 1885 年を中心に盛り上がりを見せたフリー・ナイアガラという保護運動は、こうした状況を何とかしようと、知識階級の人々が起こした運動だった。ただし、彼らは滝周辺で行われているショー・ビジネスには眉をひそめていたが、観光そのものを否定しているわけではなかった。ナイアガラ周辺

---

[11] たとえば、1835 年にロックポート・ナイアガラ鉄道が開通し、1846 年に遊覧船が運航を開始、1848 年には歩道橋が完成した。

[12] *The Times*, 23 August 1859.

の土地は 18 世紀末ごろまでは公のものだったが、やがて切り売りされていき、19 世紀後半までには多くの土地所有者の私有地となっていた。そのため、旅行者の滝へのアクセスは限られており、お金を払わずには滝を見ることはできない状況であった。また、水力を利用しようと無秩序に建てられた工場が景観を損ねていた（Gardner 21-22）。こうした状況からナイアガラを救い、ここを訪れる旅行者の利益を守ろうと、景観設計者オルムステッド、画家のチャーチ（Frederic Edwin Church, 1826-1900）、建築家のリチャードソン（Henry Hobson Richardson, 1838-1836）、カナダ総督ダファリン卿（Lord Dufferin, 1826-1902）、美術史家ノートン[13]などが中心となって行われたのがこの保護運動であるが、イギリスにおいても大きな関心を呼んだ。[14] 1880 年、オルムステッドら調査団が『ナイアガラ滝周辺の景観保護についての特別報告』（*Special Report of New York State Survey of the Preservation of the Scenery of Niagara Falls*）をニューヨーク州議会に提出した際には、保護を訴える請願書が付されたが、そこには、ロングフェロー（Henry Wadsworth Longfellow）、エマソン（Ralph Waldo Emerson）、ローウェル（James Russell Lowell）などのアメリカの著名人に加えて、ラスキン、カーライル、スティーヴン（Leslie Stephen）などの英国文人も署名していた。

ナイアガラについてのこの調査報告書の内容は、①ナイアガラがいかに多くの旅行者を惹きつける景勝地であるかを力説し、②しかし、自然美を味わうためにやってきた旅行者の多くは、ナイアガラの現状（工場と娯楽施設による景観破壊、商業主義による旅行者の搾取）に失望しているということを報告し、③旅行者が滝本来の美しさを楽しめるよう、州政府が滝周辺の土地を買って公有化することを提案する、というものである。報告書で繰り返し主張されているのは、土地の私有が景観を損なうことにつながり、公共の利益を損なっているということである。土地の私有化の弊害には当然観光業も含まれており、美しい自然の景観を見世物にしてはならない、娯楽施設で埋め尽くしてはならないといったことも述べられているが（Gardner 19）、州政府が土地を買い上げた後にやるべきこととして具体的に提案されているのは、川岸と川中の島から製紙工場、製材所、掘立小屋などの目障りな建物、防砂堤、防氷堤などを一掃し、木を植えて散歩道を作ることである。ナイアガラ村から上流の吊り橋まで川に

---

[13] オルムステッドはバッファロー・パーク、ニューヨークのセントラル・パークなどの設計で有名。チャーチはハドソン・リヴァー派の画家で “Niagara” (1857) などの風景画で有名であり、アメリカではターナーの後継者と評された。上述のようにノートンは英国文人とも交流が深く、新聞などへの公開書簡を通して影響力を発揮した（Hall, “Niagara Falls” 32-33）。

[14] ナイアガラ保護がイギリスで関心を呼んだ背景には、チャーチの描いたナイアガラ滝の絵の影響もあるだろう。この絵はヨーロッパでも巡回展示され、好評を得たという。ラスキンも褒めたと伝えられる（Hall “Niagara Falls” 31-32）。

沿って 1 マイルほどの遊歩道を作り、滝を見渡す展望台を広く取り、木を植えることで村や工場など人工性を感じさせるものを隠すなど、旅行者のための公園整備が提案されている（11-12）。訪れる観光客が不快・不便な思いをせずに景観美を楽しめるようにすることが主眼であって、産業・観光の発展と景観保護のバランスを取ろうという現実主義的・実務的な考え方が見られる。

後で見るように、英国湖水地方では、鉄道延伸によってマス・ツーリズムが加速することによる悪影響が懸念されていたが、ナイアガラでは 1830 年代にすでに鉄道も開通していたから、もはやこれを押しとどめるというよりは、「今後ますます増えることが予想される観光客」（12）の利便性を考えようとしたのであろう。報告書には「滝を訪れることはもはや金持ちの贅沢ではない。鉄道のおかげで庶民でもナイアガラへ来ることができるが、・・・［滝を見るのに］高い料金を取られることは・・・彼らには重い負担だ。従ってナイアガラを州立公園にする計画は金持ちの審美眼（taste）と美的満足感（aesthetic comfort）に訴えるだけでなく、貧しい人々の懐具合にとってもよいのだ」（24-25）という主張もなされている。

こうした現実主義的で民主的な考えを見せる一方で、この報告書は、ナイアガラの価値は、観光業者がお金を取って見せようとするお仕着せの娯楽よりも、滝が持つ「高次元の感情、想像力に訴える力」にこそある、そうしたものを求めて訪れた「感受性の強い、瞑想を好む（receptive, contemplative）」人々の楽しみを妨げてはならない、ということも言っている（9-11）。ここには、景観美というのは「見る目、味わう心（an eye to perceive, a heart to enjoy）」（W. Wordsworth 93）のためにこそ保護されるべきだという、ワーズワスの主張にも似た教養主義的な考え方も見え隠れする。そして、以下のような主張がなされる。

> 偉人たちの人生、業績、死と関わりのある場所は、神聖な遺産として保存され、後の世代へ受け継がれていくべきであるが、同じように、美しさ、壮大さなどによって人間の高邁な感受性に訴える自然の恵みもまた、敬意を持って保護されるべきである。（Gardner 15）

19 世紀後半というのは、偉人たちの暮らした家や墓を記念碑として保存しようという運動も英米でさかんになっていく時代であるが（Hall, “Niagara Falls” 26）、自然地保護の考え方もこれと連動していると言えるだろう。

さて、報告書と請願書が出されてもナイアガラの保護区化はすぐには実現せず、むしろ、1882 年には滝の下に水力発電所を作る計画さえ出てく

る。[15] このことを報じたイギリスの新聞『グラフィック』には、アメリカ人はラスキンが渡米して抗議してくれることを願っている、とある。[16] これは、後で見るように、1875-76 年に湖水地方中心部への鉄道延伸を阻止した、ラスキンの毒舌ともいえる猛抗弁を念頭に置いたものであろう。なかなか法案が可決しないことに業を煮やしてか、1883 年ロンドンでは、週刊誌『スペクテイター』が「ナイアガラの破壊」（“The Destruction of Niagara”）という記事を出す。「ここ数か月、ナイアガラのゆく末に関するアメリカでの議論がイギリスの新聞でも時々報道されているが、それを読んでいない人には、この記事のタイトルはばかげて聞こえるだろう。ナイアガラという世界最大級の自然現象、〈永遠〉の象徴と言ってもいいものが、人の活動によって破壊され得るのだろうか」と記事は始まる。「しかし事実ナイアガラは危機にさらされており、この危機に一般のアメリカ人は十分気づいているとは言えない」とし、「ナイアガラ滝はアメリカにのみ属するものではなく、人類全体のために存在すると看做すべきである」と主張する。ただし、「海を渡っていく旅行者でこの滝を訪れない者はいない」と言っているように、ここでの「人類」とは旅行者のことであり、主としてイギリスからの旅行者が想定されているようではあるが。

続けて記事は、「人類全体」にとって重要なナイアガラを保護するために、イギリス人がもっと後押しすべきであると訴える。なぜなら、こうした自然地を保護しようという運動は「もともとある一人のイギリス人に端を発していると言ってもいい」からだ。このイギリス人が誰を指すのか断定することはできないが、ナイアガラ保護運動をイギリス側から支持したラスキンやローンズリーにとって精神的支柱であったワーズワスの名前は、有力候補として考えられるであろう。ワーズワスが中心となって 1844 年に展開されたケンダル・ウィンダミア鉄道反対運動は、それ自体は失敗するものの、後の湖水地方における鉄道反対運動ひいては景観保護運動に大きな影響を与えている（Richards 124, 125）。さらにさかのぼれば、1810 年の初版から一貫してそのガイドブックで訴えている、湖水地方は「一種の国民の財産」（W. Wordsworth 93）であるというワーズワスの主張は、後にナショナル・トラストが設立される際の創設理念を支えて

---

[15] スコットランドの夕刊紙『ダンディー・イヴニング・テレグラフ』1884 年 10 月の記事には、蓄電池の発明（Faure Battery, 1881）により電気を蓄えることが可能になったので、今後は、ナイアガラは北米全体に動力を与えられるだろう、とある。続けてこの記事は、ロセイ川の力でアンブルサイドに明かりをともし、ラングデイルの製材所を動かすこともできる、カンブリアの滝が夏に作り出すエネルギーは、次の冬にロンドンで電気自動車を動かすのに使えるだろう、とも言っている。英国湖水地方とナイアガラとがパラレルに論じられている点が興味深い（“The Possibilities of Electricity”）。

[16] *The Graphic*, 3 June 1882.

いる（Gill 259-60）。イギリスにおける自然地保護活動のそうした流れを踏まえてのことであろう、『スペクテイター』はさらに、「イギリス国民が現状を把握し、保護の必要性を自覚し、具体的な保護策の提案についてきちんと理解すれば、イギリスにおける世論が形成され、アメリカでの仕事が容易になるだろう。・・・イギリス人の心からの言葉は『海の向こうの同朋』の大部分に敬意を持って受け止められるだろうから」と主張する。兄貴分としてのイギリス人がアメリカ人を導いてやらなければ、という恩着せがましさが感じられなくもないが、同じ英語を話す同朋（“kin beyond sea”）として危機感を共有しようという意識も感じられる。ナイアガラの置かれている危機は次の二点にまとめられている。

①観光業のエスカレート：お金を払わずには滝を見ることができない。滝を見るだけで 24 シリングもかかる。色つきのメガネを売りつけられ、滝に背を向けて股を開き、色レンズを通して、滝をさかさまに覗くのがいい、と言われる。詐欺まがいの土産品を売りつけられる。入場料を払って滝を見るために園内（park）[17]へ入ると、客はピクニックをしたり、パヴィリオンでダンスに興じていたりする。イルミネーションを施した噴水、色とりどりの照明で照らし出された滝など、ナイアガラは歪められた姿で現れ、〈自然〉が持つ健康的な影響は排除されている。
②工場などの乱立：滝のもつ計り知れないパワー故に、ナイアガラは利用されてしまう。技術者にとっても抗し難い誘惑となるだろう。製材所、製紙工場、突堤、防氷堤、タールを捨てていくガス工場、ごみや廃材の山が景観を損なっている。

ニューヨーク州への報告書よりももっと明確に、規制なしの観光業、無秩序な産業開発がナイアガラのよさを大きく損なっていることを指摘している。風景に背を向けて色レンズを通してそれを眺めるという方法は、18 世紀のイギリスで流行ったピクチャレスク・ツアーにおいて行われた風景の楽しみ方を髣髴とさせるものであるが、ピクチャレスク・ツアーはすでに『シンタックス博士のピクチャレスク旅行』（*The Tour of Doctor Syntax in Search of the Picturesque*, 1812）などで揶揄の対象になっている。ニューヨーク州への報告書にも観光業の行き過ぎについては指摘されているが、こうした例は挙げられていない。お

[17] ここでも park という言葉が使われているが、アイロニカルな響きが感じられる。ダファリン卿が 1878 年にナイアガラを国際的な公設の公園（international public park）にしようと提唱したときには、遊園地か飲食施設（tea garden）でも作るのかと誤解された（*The Examiner*, 5 October 1878）。

そらくはナイアガラ観光の嘆かわしい現状をイギリス人に効果的に伝えるために『スペクテイター』が持ち出した例であろう。

現状報告の後には、保護の必要性が訴えられているが、その際に強調されるのはナイアガラの持つ景観美の価値である。「ナイアガラは唯一無二の存在である――世界第2位の滝であり、人が自然界に求めるものすべてを有している――ナイアガラは滝だけでなく、急流、島、瀑布、洞穴、渦、滝壺など様々な景観美が楽しめ・・・それらすべてが独自の全体像を作り上げている」とある。そして「見る者を宇宙の永遠なる力と間近に交信させてくれ、崇高の念を呼び覚まして我々を圧倒する、そうした抗しがたい力を持つ」とし、このあと、月明かりに浮かび上がる幻想的な滝の描写に移る。この辺りにはロマン主義的な自然観の影響が見られる、と言ってよいだろう。

最後にナイアガラを守るためにすべきことが提示されるが、「ナイアガラはその最大の敵、センセーショナリズムから解放されねばならない。見世物のような扱いをやめ、滝を自然物としての元の状態に戻さなければならない。・・・ナイアガラに対して人の手が加わったところはすべて現状復帰しなければならない。そうすることによってのみ素朴な美しさと崇高さをとり戻すだろう」と主張している。ナイアガラを何から守るべきか、というときに、「センセーショナリズム」を一番に挙げ、産業というよりは商業化された観光を敵としている点は重要であろう。ニューヨーク州への調査報告書は、土地の私有化を問題の元凶としてこれを公有化することを主張し、どちらかと言えば、工場などによる景観破壊から旅行者の利益を守ることを訴えているが、『スペクテイター』では、卑俗な観光への非難が強いことが特徴的だ。[18] そして、「世界中の人々にとって、将来の人々にとって、物質的にも倫理的にも利となるこの法案が廃案になるとしたら――アメリカが公私ともに巨大な財産を持ちながら、20万ポンドのお金を用意できないとしたら、恥ずかしいことだ」と結ぶ。

この記事の成果があったのかどうか、イギリスの世論の後押しがどの程度あったのかは定かでないが、1885年ようやく議会は法案を通し、ナイアガラは保護区となることが決定される。[19]

３．アンブルサイド鉄道反対運動（1875-1887）

冒頭にも示したように、ナイアガラ保護法案が可決されたというニュースは

---

[18] ただし、具体的方策に関しては、オルムステッドらの報告書の提案に賛成している。

[19] ホールは、ナイアガラ保護は国際的な努力があって実現したものであり、言語と伝統を共有する三つの国（イギリス・アメリカ・カナダ）の協力関係の上に成り立っていることを強調している（“Niagara Falls” 24-25）。

イギリスにおいても好意的に受け止められ、とりわけ湖水地方において鉄道敷設に反対していた人たちに力を与えた。湖水地方においては、ワーズワスの反対もむなしく 1847 年にケンダル・ウィンダミア鉄道が開通して以来、着々と鉄道が作られていたが、それらは周辺部を巡るに留まり、内部を貫く路線はなかった。山が多く費用がかかりすぎると考えられたからだろう。それでも、地域の中央部を南北に貫くウィンダミアからアンブルサイド、グラスミア、ケジックへと至る幹線道路沿いに鉄道を敷きたいという計画は何度も提案される。とりわけ 1875 年から 1887 年にかけては鉄道賛成派と反対派の間での大論争が繰り広げられ、国全体を議論に巻き込むことになっていった。(この論争を通して湖水地方の景観を国民の財産ひいては世界の財産として守っていこうという機運が生まれ、1895 年のナショナル・トラスト設立に繋がっていく。)[20]

この問題は、イギリス国内だけでなく、アメリカの新聞においても報道された。たとえば 1875 年 9 月の新聞には「英国湖水地方が鉄道や工場、石炭によって台無しにされようとしている。ワーズワスのアンブルサイドが危機にさらされている」とある。[21]これは、1875-76 年にかけて提案された、山で掘り出した鉱物を運ぶための鉄道を、アンブルサイドとケジックの間に建設しようという計画について言及したものである。この計画に対して、ロバート・サマヴェルは「鉄道は湖水地方の鉱物資源の開発に繋がる」という人々もいるが、彼らは「ワーズワス・カントリーをブラック・カントリーに変えるつもり」だろうか、と抗議している（Somervell)。サマヴェルは翌年『湖水地方における鉄道延伸への異議申し立て』（*A Protest against the Extension of Railways in the Lake District*, 1876）というパンフレットを出すが、そこにはラスキンが序文を寄せ、「鉄道がやってくれることなんてせいぜい、グラスミアに居酒屋を開き九柱戯［スキトル＝ボーリングに似たゲーム。9 本の瓶をたて、円盤や球を投げて倒す］を開催させることぐらいだ、そのうち湖は排水で溢れ、岸辺にはジンジャービールの空き瓶が転がることになるだろう」(6)と警告している。

再び 1884 年に、今度はもう少し短くウィンダミアからアンブルサイドまでの僅か 8 マイルの鉄道建設が計画されたときにも、ラスキンは真っ先に異を唱えた。「民衆が真っ先にほしがるものが彼らにとって必ずしも最善のものとは限らない」、「少しもほしくないもの、あるいは現時点では想像すらできないもののなかにこそ、極めて素晴らしいものがあるものなのだ」（“Mr. Ruskin”）と諭し、鉄道が延びた後のディストピアを描いてみせる――ワーズワス・クレセ

[20] 19 世紀後半の湖水地方における鉄道敷設計画に関する論争史については別の稿に譲るが、Marshall and Walton 204-15, Joy 195-222 などでも概観されている。
[21] *Cincinnati Daily Star*, 10 September 1875 など。

ント、シルバー・ハウ・サーカスといったロンドン郊外のような趣の町、下水が流れ込んで異臭を放つライダルとグラスミアの湖、ヘルヴェリン山頂へ昇るためのエレベーター、頂上にできたティー・ルームやカジノ、ビリヤード場、サールミア湖岸の細長いスペースに作られたテニスコート、といったものが想像されている。あまりにも突飛で誇張も大きいこうした発想は、いったいどこから出てきたのだろうか。無論、鉄道開通によって新しく開発が進んでいた近郊の海辺のリゾート地、ブラックプールやモーカムが念頭にあったのかもしれないが、娯楽のために開発されたこれらの町よりは、もともと雄大で美しい自然景観が旅行者を惹きつけていたのに、鉄道によってすっかり卑俗化され、遊園地と化したナイアガラの状況が、鉄道開通後の湖水地方のイメージとしてラスキンの頭に浮かんだのではないだろうか。ノートンなどナイアガラ保護運動の担い手との交流があり、請願書への署名も行っていたことを考えれば、ラスキンがそうした発想を持っても不思議ではない。1832 年にラトロウブがナイアガラを見て、ストックギル滝やライダル湖、アンブルサイドみたいに世間ずれしていると嘆いたように、ラスキンは、鉄道が通ったりなどしたら、アンブルサイドやグラスミアはナイアガラのようになってしまう、と恐れたのではないかと思われる。

ラスキンのこうした攻撃的で大げさな反対論は、ドン・キホーテみたいだと揶揄され、鉄道に反対するのは、労働者階級の旅行者を締め出すことで湖水地方の自然美を独占しようとする、知識人階級の身勝手だと非難されることになる（“Mr. Ruskin and Modern Society”）。すると今度は、湖水地方の静かな美しさを、一部の投機家の利益のために損なっていいのか、国民全体の、そして将来の国民の利益を損なっていいのか、という反論が出され、アンブルサイドという片田舎の鉄道計画は、国全体を巻き込む大論争へと発展していった（Richards 128-39）。そして、ナイアガラ保護に関してその国際的な観光地としての価値が強調されたように、湖水地方に関しても、ローンズリーやブライス（James Bryce）らの鉄道反対派は、これが国内のみならず、植民地、アメリカ、ヨーロッパから多くの旅行者が訪れる国立公園としての役割を持つことを強調している。[22] 結局アンブルサイドの鉄道敷設計画は 1887 年に否決された（“Opposition”）。

[22] “The Lake District at present serves the purposes of a great National Park, and is annually visited (on account of its exceptional beauty) not only by thousands of people from all parts of the United Kingdom, but by great numbers from the British colonies, the United States of America, and the Continent of Europe” (“Petition against the Ambleside Railway Bill, 1887,” quoted in Hall, “American Tourists” 106). 湖水地方が国立公園に制定されるのは 1951 年のことである。

４．景観保護運動とワーズワス

1880 年代の湖水地方においては、アンブルサイド鉄道だけでなく、南西部に石炭やスレートを運ぶための鉄道（ブレイスウェイト・バタミア鉄道、エナーデイル鉄道）を作ろうという計画もまた、景観保護運動によって阻止された（Joy 198）。マンチェスターの飲み水確保のためにサールミア湖にダムを建設することに対する反対運動は失敗に終わるが、[23]この運動をきっかけに湖水地方擁護協会（Lake District Defence Society、以下 LDDS と略す）ができて、共有地や遊歩道の保護活動が行われるなど、湖水地方では、自然地保護の運動はさらに発展を見せる。こうした運動の中心的役割を担った者たちの多くはまた、ワーズワス協会の会員でもあったということが示唆するように、[24]彼らの景観保護の考え方には、ワーズワスの影響があることは無視できない。たとえばローンズリーは、ブレイスウェイト・バタミア鉄道への反対運動が成功した際「勝利できたのはひとえにワーズワスのおかげだ」と語っている（Gill 257）。

アメリカ人の存在も無視できない。LDDS には多くのアメリカ人が賛同した（Ritvo 121）。1890 年にダヴ・コテージをワーズワスの記念館として保存しようという運動が起きた際には、湖水地方における景観保護運動を担った人々の多くがこれに賛同したが、この運動の中心人物ブルック（Stopford Brooke）は、「英語を話す人々」のためにこの家を保存したい（Brooke 21）と呼びかけ、アメリカ人からも多くの寄付を集めている（Hebron 153）。ホールは、ワーズワスの存在は英語を話す者同士という同朋意識を強め、大西洋をまたいでの文化的連携を強化するのにも大きな役割を果たし、そのことが英米両地域の景観保護運動における協力関係にも貢献していると論じている（“Niagara Falls” 26-27）。

他方で、ダヴ・コテージ保存のための寄付集めが進められている最中、次のような記事が英米両方の新聞に掲載されたことも見逃せない。

> グラスミアにあるワーズワスのコテージを購入するのに 1,500 ポンドも費やそうなどという馬鹿げた計画は失敗することが望まれる。・・・理性的なワーズワス崇拝者なら、グラスミアの教会墓地を訪れるだろう。入場料など取られずに詩人の墓を詣でることができるから。・・・ワーズワスはむし

---

[23] サールミア湖を貯水池にするための法案は 1879 年に議会を通り、その後計画の若干の修正を経たのち、1890 年にダム工事が開始され、1894 年にダム及び貯水池が完成する。反対運動とその失敗の過程については、Ritvo 参照。

[24] Ruskin, Stephen, Rawnsley, William Knight, Brooke, Bryce, Lowell などワーズワス協会のメンバーの多くが個人的に保護運動と関わっただけでなく、協会全体としても LDDS のメンバーになった (Gill 257-58)。ワーズワス協会ではアメリカ人も発言力があった。たとえば Henry Reed はアメリカにおけるワーズワス詩集の出版で尽力した。また Lowell は 1884 年に会長を務めている。

ろ、自分の崇拝者たちには、湖水地方における一般通行権を守ろうと奔走する地元の協会を助けるために余ったお金を使ってほしいと思っただろうに。（“The Wordsworth Cottage”）

寄付をするお金の余裕があるならば、ワーズワスの家を保存することより、一般通行権の保護といったワーズワスの理念を守るために使った方がいいという意見は興味深い。ここには詩人の暮らした家を博物館化することへの反発が見られる。（ワーズワスへの崇拝の念を観光産業に組みこみ、Romantic Commodity としてしまうという危険性にも気づいていたかもしれない。）結局は、1891 年にダヴ・コテージはワーズワス記念館として保存公開され、この記事を書いた人物の懸念通りになってしまうが、湖水地方の静謐な美を守りたいという詩人の願いもまた、受け継がれていくことになる。上述のように、ワーズワスの書いたガイドブックや鉄道反対のためのパンフレットは、その自然保護的思想を伝えていくことになった。加えてまた、古くから慣習として認められていた歩く人々の通行権（right-of-way）、遊歩道（public footpath）を維持することにも熱心だったワーズワスの精神は、[25] 19 世紀末にかけて湖水地方などで盛んになっていく遊歩道や共有地を守る運動などにも影響を与えている。

このように、湖水地方における自然地保護運動には、ワーズワスの影響が色濃く窺われる。場合によっては、自然地そのものの価値、美しさのゆえにこれを保護しようというよりは、ワーズワスが愛し、守ろうとした自然美であるからこれを保存しよう、という傾向も見られる（Yoshikawa 184-91）。しばしば言われることだが、1895 年創設のナショナル・トラストの正式名称が The National Trust for Places of Historic Interest or Natural Beauty（歴史的名所や自然景勝地のための国民の財団）であるということは、イギリスにおける自然地保護運動においては文化遺産としての景観保護という側面が強いことを示している。それに対して、アメリカでは人の手の加わっていないウィルダネスの保護（preservation）という言い方がされることが多いという（Hall, “Towards World Heritage” 4）。こうした違いがあるのは確かだろうが、上述のように、1880 年のナイアガラの景観保護運動の際には、偉人ゆかりの場所を重要な文化遺産として保存するように、自然美も敬意を持って保護することが必要だと主張されていたことは見逃せない。ナイアガラはヨーロッパの人にとって、アメリカのウィルダネスあるいは自然の驚異（wonder of nature）を象徴するものだったかもしれないが、19

[25] 昔から慣習として庶民に与えられていた私有地を通る権利は、その土地の所有者が変わったからといって奪われてはならない、とワーズワスは訴えている。C. Wordsworth 2: 303 参照。

世紀末までにはすでに観光名所として 100 年もの、英国湖水地方に負けずとも劣らない長い歴史があり、絵画にも多く描かれていた。よくも悪くもそれは文化化（culturalize）された自然だった。従ってこの場所の保護運動は、イギリスの場合と似たような言説、すなわち文化遺産として残そうという言説で、行われたと言えるだろう。

他方、湖水地方における自然地保護運動もまた、ナイアガラの保護運動に大きく影響を受けていた。湖水地方は 19 世紀初頭こそナイアガラに先んじて世間ずれ（hacknied）していたが（Latrobe 1:65）、1830 年代にロックポート・ナイアガラ鉄道が開通して以降は、ナイアガラの方が先に、遥かに速く大衆化し卑俗化していった。こうなる前に食い止めなければ、という思いが、湖水地方における鉄道敷設計画への過剰な反応、反対運動に繋がったのではないかと考えられる。こうした、自然景観の大衆化・卑俗化への拒否という美学的意識には、ワーズワスそして彼を継承したラスキンの影響があり、それは出版、また個人的交流を通して、英米の知識人たちに共有されたものであった。19 世紀末における英米の自然地保護運動は、今日的な意味での環境意識よりはむしろ、文学的連想や美学意識に支えられていたという点は押さえておくべきだろう。それは感傷的であり、文化エリート主義、教養主義的であったという批判も可能であろうが、環境保護運動の黎明期においては、大西洋を挟んでの美学的、文学的感性のやり取りこそが重要であったと改めて確認しておきたい。

引用文献

"A Week at the Lakes." *The Gardeners' Chronicle of Horticulture and Allied Subjects* 9 (1878): 653.

Brooke, Stopford. *Dove Cottage: Wordsworth's Home: 1800–1808*. London, 1890.

Calvert, George. *Scenes and Thoughts in Europe. By an American*. New York, 1846.

"Cockneyism of English Cascades." *Literary World, A Journal of American and Foreign Literature, Science, and Art* 7 (1850): 73-74.

Combe, William and Thomas Rowlandson, *The Tour of Doctor Syntax in Search of the Picturesque*. London, 1812.

"The Destruction of Niagara." *The Spectator* 30 June 1883.

Gardner, James T. *Special Report of New York State Survey of the Preservation of the Scenery of Niagara Falls, and Fourth Annual Report on the Triangulation of the State. For the Year 1879*. Albany, 1880.

Gill, Stephen. *Wordsworth and the Victorians*. Oxford: Oxford University Press, 1998.

Hall, Melanie. “American Tourists in Wordsworthshire: From ‘National Property’ to ‘National Park.’” John K. Walton and Jason Wood, eds. *The Making of a Cultural Landscape: The English Lake District as Tourist Destination, 1750-2010*. Farnham: Ashgate, 2013. 87-112.

---. “Towards World Heritage.” *Towards World Heritage: International Origins of the Preservation Movement, 1870-1930*. Farnham: Ashgate, 2011. 1-19.

---. “Niagara Falls: Preservation and the Spectacle of Anglo-American Accord.” Melanie Hall, ed. *Towards World Heritage: International Origins of the Preservation Movement, 1870-1930*. Farnham: Ashgate, 2011. 23-44.

Hebron, Stephen. *Dove Cottage*. Grasmere: The Wordsworth Trust, 2009.

Hills, W.H. “A New Lake District Railway.” *The Times* 21 December 1886.

Hutchings, Kelvin. “Romantic Niagara: Environmental Aesthetics, Indigenous Culture, and Transatlantic Tourism, 1776–1850.” *Symbiosis: A Journal of Anglo-American Literary Relations* 12.2 (October 2008): 131-47.

Joy, David. *A Regional History of the Railways of Great Britain, vol.14: The Lake Counties*. Newton Abbot: David & Charles, 1983.

Knight, William, ed. *Letters of the Wordsworth Family from 1787 to 1855*. 3 vols. Boston & London: Ginn and Co., 1907.

Latrobe, Charles Joseph. *The Rambler in North America*. 2 vols. New York, 1835.

“Mr. Ruskin and Modern Society.” *York Herald* 18 January 1876.

“Mr. Ruskin on the Ambleside Railway.” *The Standard* 15 April 1884.

Marshall, J.D. and John K. Walton. *The Lake Counties from 1830 to the Mid-Twentieth Century*. Manchester: Manchester University Press, 1981.

Mulvey, Christopher. *Anglo-American Landscapes: A Study of Nineteenth-Century Anglo-American Travel Literature*. Cambridge: Cambridge University Press, 1983.

“Opposition to the Ambleside Railway.” *Morning Post* 5 February 1887.

Otley, Jonathan. *A Concise Description of the English Lakes*. Keswick, 1823.

Payn, James. *A Handbook to the English Lakes*. London, 1859.

“The Possibilities of Electricity.” *Dundee Evening Telegraph* 16 October 1884.

Powell, Cecilia and Stephen Hebron. *Savage Grandeur and Noblest Thoughts: Discovering the Lake District 1750–1820*. Grasmere: The Wordsworth Trust, 2010.

“The Rescue of Niagara.” *Pall Mall Gazette* 17 June 1885.

Richards, Jeffery. “The Role of the Railways.” Michael Wheeler, ed. *Ruskin and Environment: The Storm-Cloud of the Nineteenth Century*. Manchester: Manchester University Press, 1995. 123-43.

Ritvo, Harriet. *The Dawn of Green: Manchester, Thirlmere, and Modern Environmentalism*. Chicago: The University of Chicago Press, 2009.

Ruskin, John. Preface. *A Prospect against the Extension of Railway in the Lake District* by Robert Somervell. Windermere, 1876. 1-9.

Somervell, Robert. "A Protest against the Construction of New Railways in the Lake District." *Lancaster Gazette* 31 July 1875.

West, Thomas. *A Guide to the Lakes in Cumberland, Westmorland, and Lancashire*. London, 1778.

Wilson, John. "Christopher at the Lakes, Flight Second." *Blackwood's Edinburgh Magazine* 32 (1832): 121-38.

Wordsworth, Christopher. *The Memoirs of William Wordsworth*. 2 vols. London, 1851.

"The Wordsworth Cottage." *Democratic Northwest* 10 July 1890; *Cornubian and Redruth Times* 13 June 1890.

Wordsworth, William. *Guide to the Lakes*. Ed. Earnest de Selincourt. Preface by Stephen Gill. London: Frances Lincoln, 2004.

Yoshikawa, Saeko. *William Wordsworth and the Invention of Tourism, 1820-1900*. Farnham: Ashgate, 2014.

Keyword(s): 英国湖水地方、ナイアガラ、自然地保護、観光、トランス・アトランティック